

# アンコール遺跡を通じた保存・修復研究（その1）

## フランス極東学院バンテアイ・クデイ「日誌」の研究

### Reconsideration of “Journal de Fouilles” of Banteay Kdei

1997年9月  
荒樋久雄

#### I はじめに

1907年、シェムリアップ州がタイの属州よりカンボジアに返還されたのに伴い、フランス極東学院によるアンコール保存事務所の開設、並びにアンコール遺跡に対する本格的な障害物の除去作業が開始された。それ以降のフランス極東学院の活動に関する概説的な通史については、今までに様々な所で散見される<sup>1</sup>。

本研究は、フランス極東学院の保存活動のうち、同遺跡の1つであるバンテアイ・クデイの保存活動を描写した「日誌」、「Journal de Fouille」を精読することにより、同学院によるバンテアイ・クデイ修復活動の軌跡・展開の時代的区分を試み、かつ、前掲文献史料より文化財修復に対する意識の変化を読みとり、現代の修復コンセプトと照らし合わせ、考察するものである。

#### バンテアイ・クデイの保存活動日誌

バンテアイ・クデイに関する保存活動の「日誌」<sup>2</sup>は1920年4月より1960年までの同境内のフランス極東学院の活動状況を記したものである。

##### 1 第1期 1920～1922年まで

障害物の除去作業開始以前の状況は、現在、夕・プロムに見られるように屋根の上から樹木が<sup>おいしげ</sup>生茂り、樹木に<sup>おほ</sup>覆い尽くされ、通行困難であったことが散見できる<sup>3</sup>。同「日誌」には、1920年4月より遺跡内の障害物（樹木、崩壊石材など）の除去が開始され、当時、夕・プロムで作業を行っていた二つの班（1グループ、20～30人前後の労働者で構成）がバンテアイ・クデイに移動し、東西両門より中心祠堂に向かって、二方向より漸次、除去作業が行われたことが記されている。また同作業を指

<sup>1</sup> Pich Keo, "Activite Culturelle sur les monunents d Angkor", Cultural Heritage in Asia (6), pp89-104, Sophia Project Meeting on The Preparation of its Second Phase, Institute of Asian Cultures, Sophia Unive1sily of Tokyo, 1992

UONG VON, "The Angkor Conservation Office activities from 1907 to 1992, pp370-407,カンボジアの文化復興(8), 上智大学アジア文化研究所, 1993

Jacques CLAUDE, "ANGKOR", pp.168-170, Bordas, 1990 EFE0, "Le Cambodge et l'oele Francaise d extreme-orient, EFE0 p.15 など

<sup>2</sup> 同日誌の正式タイトルはなく、「Journal de Fouille」, "Rapport"などと呼ばれている。

<sup>3</sup> 同日誌、1920年9月日付

揮していたのはH・マーシャルとCH・バター<sup>4</sup>であった。

#### 除去作業内容

この除去作業の内訳は、樹木の伐採、崩壊石材の除去ならびに周辺部への整理、堆積土の除去、碑文・遺物の収集、崩壊石材の再構成・復原作業、そして 図面の作成<sup>5</sup>などに分類できる。

#### 補強工事

とりわけ、崩壊石材を再構成し、元通りの位置に復原する作業は、小規模ではあるが、遺跡の除去と同時に行われ、それに伴い、コンクリート梁による支持 ( poteles et poutre en beton )、コンクリートによる枠型補強 ( cadres en beton )、鉄筋による帯状補強 ( ceintures en fer )、鉄製 鋲 ( agrafes en fer ) による緊結など、コンクリート・鉄などの近代技法を用いての補強 ( consolidation ) が行われた。<sup>6</sup>

#### 観光利用目的

また、除去作業の開始当初より、この作業の目的の1つに、遺跡が観光客に供することが示唆されている。<sup>7</sup> 1920年代初期といえ、季節を問わずアンコールへの観光が一般化する時期<sup>8</sup>であり、除去作業がアンコール観光の本格化と軌を一にすることを窺わせる。

#### 美術品の本国移送一

1922年9月21日には、パンテアイ・クデイにて発見されたブロンズ製の美術品などがサロウ博物館 ( Albert Sarraut ) に持ちこまれ<sup>9</sup>、また1927年にはタ・プロム遺跡内で発見された女性像がルーブル美術館に送付予定である事が記述されており<sup>10</sup>、この時代に美術品の本国への移送がフランス極東学院を通して組織的に行われていたことが窺える。

#### 除去作業の終了

記述にはこの除去作業全体の終了は示されていないし、1922年10月以降、1927年まで、「日誌」には記載がない。しかし、1922年4月の記述までで、ほぼ遺跡の全体の除去が終了し、最後までパンテアイ・クデイで作業していた二つのグループが、ニャック・ポアンの作業のため、送られたことが記されている<sup>11</sup>ことから、除去作業はこの時点でほぼ終了したと考えられる。

#### 小結

この第一期にあたる時期では、遺跡内の通行に支障となる障害物の除去作業が主な内容であったことが読み取れる。またアンコール遺跡全体を通しての除去作業は、アンコール・ワット ( 1908 - 1911 ) アンコール・トム都城内 ( 1908 - 1920年頃 ) での除去作業がまず最初に行われ、その後、タ・プロ

---

<sup>4</sup> Maurice GLAIZE, "ANGKOR", p191, JMAISSONNEUVE. ちなみに同日誌には執筆者の記載は見られない。

<sup>5</sup> 同日誌、1921年3月日付

<sup>6</sup> 関連記事は各所に散見できるが、とりわけ同日誌、1921年6月、7月日付

<sup>7</sup> 同日誌、1920年6月日付

<sup>8</sup> ブリュノ・ダジャンス著、石沢良昭監修「アンコール・ワット」 Bruno DAGENS, "Angkor la for et de la pierre", Gallimard, Paris 1989

<sup>9</sup> 同日誌、1922年10月日付

<sup>10</sup> 同日誌、1927年8月日付

<sup>11</sup> 同日誌、1922年4月日付

ム(1920)、スラ・スラン(1920)、タ・ケウ(1920 1922)<sup>12</sup>などの近隣遺跡一群の除去作業が続き、バンテアイ・クデイ(1920 1922)での作業もこの時期であったことがわかる。

## 2 第二期 1927年～1939年の活動

「日誌」から、1927年の7月より新たに作業が開始されたこと、その内容は、前回の作業以降の5年間の空白期間に生茂<sup>おいしげ</sup>った植物の除去、清掃作業といったものが中心であったことが窺<sup>うかが</sup>える。この作業は1～2ヶ月で終了する。それ以降は1928年、1933～1936年、1939年に簡単な作業報告が記載されているものの、本格的な作業は、第二次大戦終了以降の1949年までは行われていない。

### 学術調査

1934年5月には、バンテアイ・クデイ中央祠堂<sup>しどこう</sup>の中心部の発掘調査が行われた。同調査は、クメール建築に見られる中央祠堂中心<sup>うが</sup>に穿たれた縦穴を確認するために行われたが、表面に敷かれた砂岩のブロック、そしてその下に敷かれた3層のラテライトブロックの下層には、均質な砂層のみしか見出す事が出来ず、地中3.7mまで掘り下げた時点で発掘を中止した事が記されている。<sup>13</sup>

### 小結

この時期に行われた作業は主に定期的な遺跡の維持管理作業であり、補修作業も部分的な解体修理、コンクリートによる補強に止まる。しかし、局部的とはいえ、学術的な発掘調査が行われた点は興味深い。

## 3 第三期 1949～1960年の作業

第二次大戦ならびにその前後、一時期中断したバンテアイ・クデイの維持管理作業も、1949年11月、北門の解体工事より再開される<sup>14</sup>。この作業再開時から1960年まで工事が続けられるが、1960年を最後に、それ以降、フランス極東学院による工事記録は同日誌には見当たらない。この時期の作業記録としては、1949年11月～1950年12月、1951年11月～1953年4月、1953年10月～1954年9月、そして年間レポートとして1960年がある。この時期に、北門、東門、内周壁に接続する東側祠堂などを中心とする本格的な解体修理が行われている。

### アナスティロース

1949年12月の作業にはアナスティロースという文字が初見され<sup>15</sup>、それ以降の同「日誌」内に頻繁に見られる。通説<sup>16</sup>として、カンボジアの文化財修復においてアナスティロースは1931年のバンテアイ・スレイの修復を端緒とし、以後の修復の文章表現には頻繁に用いられるが、その本来の真意を的確に示さず、科学的根拠の上に立脚したオーソドックスな修復を装う便利な符牒として用いられた感があるとされている。

<sup>12</sup> 障害物の除去作業時期については Maurice GLAIZE, "ANGKOR"の各遺跡の項目より参照

<sup>13</sup> 同日誌、1934年5月日付

<sup>14</sup> 同日誌、1949年11月日付

<sup>15</sup> 同日誌、1949年12月日付

<sup>16</sup> アナスティロースについては、脚注1ならびに石沢良昭「インドシナにおける修復史と問題点について」日本建築学会1993年度大会(関東)歴史意匠部会：研究協議会

## 「日誌」に見られる語彙

修復工事に関連する用語として、同「日誌」では現在、頻繁に用いられる修復（Restauration）、復元（Restitution）を示す用語は見られず、コンクリート工事（Travaux en beton arme）もしくは補強工事（Travaux de consdidation）といった用語で表現されており、近代技法に立脚した修復活動に努めていた様子を窺わせる。

## 小結

この第三期ではバンテアイ・クデイ内において本格的な解体修理が行われ、その際、鉄筋コンクリートなど近代的な技法を用いたことが窺<sup>うかが</sup>える。ところで1960年代には、パブオン（1960 1970 中断）、プラサット・クラバン（1961 1966）、アンコール・トム南門（1960 1962）、トムマノン（1949 1966）など、数多くの遺跡が修復され、アンコール修復史上、最も広大な修復の行われた時期である。しかし、同「日誌」によると、バンテアイ・クデイ内での作業は1960年を終焉としている。1960年代、他の遺跡では本格的な修復が華々しく行われる中、バンテアイ・クデイに対しての活動は休止されることとなる。

## まとめ

同「日誌」より、バンテアイ・クデイ内で行われたフランス極東学院の活動は、

第一期（1920 - 1922）；障害物の除去・清掃、

第二期（1927 1939）；維持管理、

第三期（1949 1960）；解体修理作業

の3つの時期に大別出来ることが理解できた。

また、修復方法については、除去作業開始当初から、近代的な、当時としては最新であったと思われる工法が積極的に使用されたことが窺われ、修復作業が近代技法に依っていたことがわかる。

なお本稿は、アンコール遺跡の保存を歴史的、建築的、技術的などの各側面より捉える総合的研究の一端である。今回は歴史的分析の一部を紹介したが、同研究に関連する今後の課題としては、歴史的文献と現状に見られる修復の痕跡との比較及び検証<sup>17</sup>を行うことなどが挙げられる。

本稿は「バンテアイ・クデイ「日誌」の研究 アンコール遺跡を通じた保存・修復研究（その1）」（日本建築学会学術講演梗概集（関東）1997年9月 荒樋久雄 片桐正夫 石澤良昭）をベースに加筆・修正したものである。

---

<sup>17</sup> 藤木良昭「アンコール遺跡の劣化状況について」上智大学アジア文化研究所『カンボジアの文化復興(4)』1991  
重枝豊「バンテアイクデイ建築調査報告書」上智大学アジア文化研究所『カンボジアの文化復興(6)』